

酸漿

泉鏡花作

一

赤十字病院へ、仲よしの朋輩の見舞に行つて、新道の我が家へ歸つた時の、小銀の顔色と云ふのはなかつた。

主思ひの内箱のお辻が、

「おゝ、お歸んなさいまし、何うなさいました姉さん。」と身體の肥つた大柄なのが、慌しいまであたふたする、がさつな出迎も歸宅を待つた眞實である。

「あい、唯今。」

と揃へて脱いだ駒下駄ながら、土間に一寸目を配つて、小褌を淺く、すつと入る、と入替りに、お辻が上框の障子をぴつたり。其の手で背後からコオトを脱がす・・・白羽二重に薄彩色した淺妻船の水の裏が、弱く衣摺れの音を立てゝすらりと脱げると、唯一重にさへ、げつそりと瘦せた姿。

山茶花の花片へ、フト雪が来たやうな襟足の、撫肩を尚ほ術なさうに、友染の蒲團の上。綿は厚いが薄い膝で、長火鉢の縁へ縋るやうにしたが、

「着換へませうかね。」

「まあ一服なすつてからになさいまし。」

と何んなに寒かつたらうと思ふ、其の褪せた唇

の色に、紅を潮せと、お辻は赫と火を開けた上へ、

炭を繼ぎ／＼、

「お不斷着は奥に暖めてございますけれど、姉様、其よりかお炬燵へ行らしたら如何でございます

え。」

「些と後にしませうよ、何だか私、」

と差俯向く。聊か薄いが癖のない、柳を洗つた藝

子鬚。櫛は通るが氣の纏れで、後毛の亂れたのが、

馴れない遠出の冴の所為ばかりとは見受けられぬ。

お辻は吃驚したやうに、火の上へ火箸を其まゝ、持離れた風采で、

「まあ、何うなさいました、姉さん。」

「矢張り不可いの、また何だか容子がよくないや

うだわねえ。」

聞かれたのは其の事、と小銀は見舞に行つた朋輩の谷江と云ふのが容體を云つて、

「最う自分でも、病氣を知つて居るんだから氣休めの言ひやうがなくてさ。染々心細い事を言はれると、氣の毒で、可憫さうで、一層此方で引受けて、身代りに成つて遣りたいわねえ。」

と聲もしめやかに、下ろした鐵瓶の湯氣が消える。其も道理で、此の婦が、一度引いて世帯を持つた情人は、同じ肺病で亡くなつたのである。

今度は吃驚が、呆れ顔。

「飛んでもない姉様、お友達の身代りなんて、病人のお見舞の度に、一々そんな氣をお出しなすつちや、髪が脱けますよ。」

と禁厭のやうに駢めると、思出して、櫛をぐいと壓へたが、其さへ力なさうな様子が見えた。

「寒氣がなさりはしませんか。そんなこんなで、お心持が悪いでせう。お顔の色つたらありませんよ。熱いお出花をあがりませんか。」

「私は澤山、」

と清らかな、霜の小菊の半襟に、白魚の指を當てた。

「でも丁度いいから、お父さんに上げておくれ。困つたね、堀の内様や何か、お寺参りだと、お土産があるんだけれど、赤十字ぢやねえ。其に些と歸宅を急いだもんだから、お愛想がない事よ。」

・・・お炬燵で御本かい。」

と頭重げに二階を見た。お父さんと云ふのは、娘で食ふ親仁でない。亡き情人の、世に便りない老人を、小銀が達過ごして居るのである。

お辻は一層實體に、

「最う些と前でしたよ。姉様がお案じなさいませ、谷江さんの御祈念につて、お寒いのに、お留め申しましたけれど、運動もしたいからつて、深川へ御参詣にお出掛けでございますよ。」

「深川へ、まあ、お友達の事にまで・・・濟まないわねえ、一寸、」

「否、御心配をなさらないやうに、谷江さんの分になすつていらつしやいますが、眞個は矢張り何ですよ。姉様が此の間中、何だかお勝れなさらないもんですから、其でございますよ。ですもの、串戯にも姉様、そりや谷江さんだつて、お最惜いには違ひありませんけれども、ですけれども、」

とぼつちやりした頬に、ちよんぼり可愛いのを早口に疊掛けて、

「嘘にも身代りに成らうなんて、直に然う眞にお成んなさるのも、矢張りお身體が弱いからです。」

今日なんぞも、お鹽梅の悪いのを推してお見舞に
なんぞ行らつしやらなけりや可うございますのにさ、
お顔の色つたらないぢやありませんか。あれ！ 何
うかなすつたんでございますか。」

と云ふ時、また蒼白く成つて見えた。

「そんな事ぢやないの、病氣ぢやないんだけど、
私、心持が悪くつて、悪くつて、何とも仕様のない
事があるの、何うしようかと思ふんだよ。」

「え、蛇でも御覽なさいましたか、時ならな
い。」

「あゝ、蛇を飲んだほどな思ひなんだわ。」

と言ひも終らず、お辻が慌しく背中を擦るまで、
あつと云つた。

「何うなさいましたんですねえ、姉さん。」

「擦らなくつても可いの、胸が疼むんぢやない事
よ、咽喉へね、」

と力のない咳をして、

「咽喉へ酸漿が引つ掛つて、苦しくつて苦しくつ
て……」

「酸漿が……酸漿でございますか。」

「あゝ、其の酸漿がねえ、一通りなんぢやないの。
——お湯を一杯おくれ。一寸、あゝ、否、よ
さうよ。」

挿込を晃として、

「此の上、胸へ流込んだら、何うしよう、私は死
んで了ふよ。お辻、何時か御參詣をして、鳩の豆を
買ふとつて、指のくづれた男に手を握られた事なん
ぞ、今日のから見りや何でもない。」

「まあ、癩坊が何うかしたのでございますか。」

「癩 だか何だか、其はお前、何とも言ひやうの
ない、胸の悪い不氣味な女房がね、病院 下で、電
車で、私の隣へ坐つたのさ。……こんな稼業を
して居ながら、人様の服装の事なんぞ言へた義理ぢ
やないけれど、縞柄も分らなく無つた、洗晒した半
纏も可いがね、擦れ／＼に成つた其の下に、汚い白
い肌襦袢の襟を出してね、前掛をしめないの。綿ネ
ルの古いのなんか露出でさ。繼だらけの足袋の、其
も破れた、指の爪が眞黒さ。」

そんな事より、べろんと剥けた額が、やがて鬚の
處まで脱上つた生際へ、生毛が、もや／＼逆に立つ
て、すきや燈籠をいぼ尻巻にしたつけか、こけ下つ
た頬邊の處へ、ずら／＼毛の前が切れて太いの
よ。・・・そして白髪交りなの。赤く爛れた眦の
下つたのが、守宮の腹を切つたやうで、それから額
へ環を掛けて青筋が斜違ひに畝つてね、可厭ぢやな
いか。お前、十筋ばかり眉毛が縦に押立つてさ、何
だかゑみわれた口が白齒だらう、白齒も凄まじい、
黄色黒い、其がね、大跨に電車へ入る時から最う爪
楊枝を噛んでゐるのさ。其の楊枝でね、齒莖の間を
ぐい／＼とせつちや、汚いものゝ附いたのを鼻の
尖で透かして見ては、こぼ／＼した手の甲で、不臆
を、堪らないと云つたやうに、やけに、きつ／＼と
引擦るの。だもの、内職の唐紅でも塗つたやうに、
腮はお前、眞赤に成つて、べと／＼と濡れて居る齒
莖から涎が傳つて・・・」

小銀は話す内も、幾度か胸を壓へ、壓へして、

「そればかりなら可いけれど、然うやつて、腮を

ごり／＼引擦る毎に、頬の肉がぶり／＼と動くと、奥

齒がぐらつくらしいわね、拍子でカチ／＼カチ／＼

と鳴るのさ、鳴るのと一緒に、キュツ／＼と鬼灯を

吹くんだわ。――檻褸のやうな袖口へ、片手を指ま

で引込めて、其の手をひきつりのやうにぶる／＼と

震はせ、震はせ、お前、片手で其の楊枝せゝりで、

汚いものを熟と見ちや、赤爛れのした、・・・あ

りや肝の蟲と云ふんだね――腮を引擦つて奥齒を力

チ／＼カチ、で、酸漿だらうぢやないか。其をね、

幾度も同じ事を引切なし・・・お待ち！ まだ

口惜いのは、前觸をするの、右のね、はじめようと

云ふ機会に、カツと、それは、咽喉を絞るやうな咳

をして、其の時、大きな口を開けるの、吐出すんだ

わ、酸漿を。脂で黒く成つた舌の尖へ出して、ぐち

やりと舐めて、どろ／＼と齒へ挟むの。眞赤に染め

たゴム酸漿よ。モ私や一生ゴム酸漿は持つまいと思

ふ。

其のね、カツと云つて開ける時は、口が耳まで裂けるやうよ。眉毛が白く、すく／＼と日向に透いてね。また明前に、あの車掌 臺の硝子窓に其の爪楊枝を持つた肱つきで、赤い腮を高慢に、筋張つた額を仰向けて、其はツンとして居るぢやないか。

手のひきつる工合から、立續けに同じ事をする、色艶と云ひ、少し、氣も何うかをかしいらしい。

「様子かね、宿場女郎の果かとも思ふ。」

と言が途絶えた。また一倍調子が弱つて、

「然う云つては悪いけれど、見てさへ、むか／＼と最う胸が悪くつて居る處へ、お辻。」

カツと其の女房が口を開ける度に、ぱちや／＼と重い唾が私の顔に掛るんだわ。」

「まあ。」

と一つ、重量のある膝をづんと支いて、お辻は身悶え。

「彼處は景色の佳い處ね、紺青のやうな川が流れて、透通つて、……枯れた林が薄青う紫が／＼つて、晝も月夜のやうな中へ、私の顔なぞ構

はないが、其のお前、景色の上へ、唾が黒い毒蟲のやうに飛ぶんだもの。口惜く成つた私、身を投げようかと思つた。

餘り堪らないから、病院 下から、四つ目あたりの橋の處で電車を下りたの。橋が掛つて、枯木が續いて、廣い處よ。．．．世界が違つたやうで、ほと息をしたけれど、頭もふら／＼してね、身體中、芬とする、然う言へば、其の女房は硫黄のやうな臭がしたつけ。

何しろ、何うかしくつちや、辛抱が出来ないもの。直き近い處の小さな蕎麥屋へ入つたの、其處で聞いたら三の橋と云ふ處だとさ。．．．麻布かねえ。

でね、金盃を借りて、水を取つて、埃が酷くつて、と言つたけれど、鹽を貰つたから言譯に成らないよねえ。

お代は上げますから、金盃は打棄つて下さいよツて、其から天麩羅を誂へたの。

其をさ、よせば可かつたんだよ、ねえ、お辻。「と情ない目で熟と見る。」

見られて、お辻は、
「へい、」と云ふ。

「唯もう極が悪いから、然う云つてさ。其の中、五六遍も取替へて、きゆつ／＼顔を洗つたんで、何うやら胸も些とすつきりする・・・出来たばかりなのを、手も着けないぢや容體らしくつて私、恥かしいもんだから、お汁の一口もと思つて、つひした覚えもない、階子段の下へ坐つて、――でも二階があるんだわね。――而してさ、蓋を取つて口をつけたの、お辻、唯口をつけたばかりなの。

然うするとお前、お蕎麥が動くかね、赤いものが、むつくり浮いたんだわ。」

あゝ、と云つて婀娜に颯む。

四

「だつて、だつて姉さん、姉様何も、其をお呑みなすつたんぢやありますまい。」

とお辻はむきに成るやうにして言消した。

重たげに又頭を掉つて、

「否、確に口へ入つたに違ひないの。だつて、眞赤な其が、ゴム酸漿と一目見るなり、はツと思つた時、お汁が舌へ觸つてさ、……。其ツ切、酸漿の形がまるつきり見えないぢやないか。慄然としてね、氣に成るから、最う一生懸命、恥も外聞もありません、お蕎麥を一筋づつと思ふほど、箸を入れて探したけれど酸漿の影もないのよ。」

ガツチリ何か咽喉の處に支へて居るわ。あゝ、お辻、

と、今は仔細を知つて怪むまいと、氣を許したやうに、雙の肩を震はした。

「頭はグラ／＼する、寒氣はする、足もとぼ／＼して、逆も電車ぢや歸られない。乗合の中で、又飛だ疎匆でもしては成らないから、と然う思つて、三

の橋から車でさ。――漸と堪へちや來たけれど、途中だつてお前、咽喉が天上へ塞がつて、夕方の美しいお日様の姿も見えなかつた。

眞暗だわ、其處等暗夜のやうな。而しちや可厭らしい婆さんの顔が幾つも見えるの、ちら／＼してね、爪楊枝の汚いものを瞻めるのやら、カツと口を開けたのやら、腮の赤いのやら、種々見えるの。お辻何どうしよう、酸漿が此處にあるの。」

と指差す指が、咽喉へ懐剣を當てたやうに、倅を物凄いまでに示したのである。

「鹽湯を、」

と言ふに及ばず、此際餘り尋常事らしいので、途中で言留んで、

「寶丹。」

と其も止した。……お辻の遣瀬のない顔も、早う黄昏の小窓の下に、少時消失せるやうに見えたが、俄然むつくりとして膝が動いたと見ると、然も嬉しげな聲に、笑を交へて、

「可いものがございます、姉さん。あの、象牙のお箸。そら、あの方のお記念だつて、何時も御飯を

上りませう。――お父さんは、御自分のお子様だ
もんですから、肺病で亡く成つたんだから悪い、と
御遠慮で、姉様に御叱言を仰有るから、此頃は詮事
なしに御無沙汰をなさいますね。何時か甘鯛の小骨
を、お二人で一緒にたてゝ、兩方で撫でて二人とも
とれた、と随分お聞かせなすつたぢやありませんか。
お父さんはお留守だし、大ぴらにお出しなさいまし
な。而して逆に撫でますと屹と取れて出たひますよ。
如何、姉さん。」
と次第に暗い中に、白いほど陽氣に云ふ。

「あゝ、然うね、」とはじめて小銀らしい聲に
成つて――其處の茶棚の抽斗から、別の箆箱に、
綺麗な、鬱金の切に包んだのを、撥の捌きにはらり
と解くと、まだ眞白な、其の象牙の色に、ほろりと
しながら、寂しく笑つて、

「堪忍しておくれ。」

「さあ、御遠慮なく、」とどつしり膝に手を置
く。

「可厭だよ、お辻。」

で、恍惚と咽喉に當ると、雪なす下を、血が透るやうに見えたが、あつと言ふ。さそくに、心得て當がつた、磨いた眞鍮の嗽 茶碗に、むゝ、と含んで、衝と何もなしに鮮血。

電燈が點いた。

「嬉しい、半分溶けて、ぶよ／＼してね。」

と目を細り。後が床の傍の、男の記念の小机をつゝと寄せると、羽織を脱がうとして、美しい裏を翻したまゝ、冷い縮緬の肩を細く、両手を重ねて、がっくりと俯向いた。

繪のやうな其の姿を視ながら、お辻がわな／＼と震へて蒼く成る間に、小銀はすや／＼と白梅の宵の呼吸。

嗽 茶碗を持つたまゝ、膝で後退りに成つて、ひよるり臺所へ立つと、女中と囁くや否や、女中は其の嗽 茶碗を隠して持つて、かゝりつけの醫者へ駈出した。

其それから小銀こぎんは果敢はかなくなまるで、血ちを吐はく度たびに、嬉うれしさうに、「あゝ嬉うれしい、酸漿ほんじきが出るんだねえ。」

【完】